ひかりのこ

12月園便り

聖ミカエル幼稚園
2015年11月20日

月主題：うれしい

『感じ取る力』

早いもので、2015年も、もう少しで終わります。大人の成長はゆっくりですが、子ども達はこの一年の中で大きく成長しました。

お部屋の自由遊びを見ていても、よくそう感じます。年少のこすもす組の子ども達、４月にはお母さんと離れられずに泣いたり、お友達と上手に遊べなかったのが、今では先生に手伝ってもらいながら、お友達と力を合わせて積み木を積み上げたり、おままごとができるようになりました。クラスの所属意識を持ちはじめ、担任の先生のお話をしっかり聞いて、みんなと一緒に動くことができるようになりました。

成長と言えば、年長のお子さんは、いよいよこの４月から、小学生になります。

11月14日に、私は札幌市の読書感想文コンクールの表彰式に役員として参加してきました。賞状授与の後、上位3名のお子さんが、壇上で感想文を朗読しました。その中で、『札幌市市長賞』に輝いた小学校5年生のお子さんの感想文に私は感動しました。『ガラスのうさぎ（高木敏子）』を読んでの感想でした。作者の敏子さんの家の一帯は、東京大空襲で、焼け野原となりました。敏子さんは形がなくなった家から体の半分が溶けたガラスのうさぎの置物を見つけます。この部分についてこのお子さんは、『家の中にいた敏子さんの母と二人の妹も、燃えさかるほのおの中、同じ苦しみを味わったに違いない。私は息が苦しくなるほど、怒りと悲しみがこみ上げてきた。』と書いています。空襲で焼け野原になった悲惨な状況をしっかり自分の中に取り込まなければ、書けない文章です。そしてこの感想文の後半は、「家族の大切さ、命の大切さ」を書いています。『限りがあるから大切にしなければならない。自分の命も、家族の命も。世界中の全ての人々の、かけがいのない命も。』

このお子さんの「感じ取る取る力」「考える力」は素晴らしいものがあります。これから小学生になる子ども達が目標にすべき力でしょう。このような力を身に着けて、成長していってほしいものです。

ミカエルの子ども達は、絵本が大好きです。礼拝のお話も大好きです。まだ、文章は書けないけれど、想像したり、考えたりして、子どもなりにたくさんの影響を受けています。だから、今こそが、「感じ取る力」を育む大切な時期のような気がします。大人の私たちは良いものを子ども達に与えなければいけません。良い本を、良い考え方を。家族で、世界の様々な問題を考えたり、お祈りしたりすることもとても大切だと思います。

今世界には、たくさんの困難なことがあふれています。悲しい出来事が頻繁に起こります。これを良い方向に向けていくには、人々の知恵と、相手の苦しみを「感じ取る力」が必要となります。そういう意味の本当の「賢さ」を子ども達が身につけてくれることを願っています。

園長　渡部良子

キリスト教保育

「札幌のキリスト教」

先日、東京のNHKからある人物について問い合わせがありました。その人は伊藤一隆（かずたか）といい、北大の前身である札幌農学校の一期生でした。1876年（明治９年）という年は日本でキリスト教が認められてまだ３年、聖公会は２年前の1874年にデニングという司祭が初めて北海道の地を踏んだのでした。その聖公会のデニング司祭が函館から札幌に来た際、伊藤一隆と出会ったのです。

伊藤はデニング司祭に洗礼を受けることを申し出、最初、司祭は滞在先の旅館で行うつもりが主人に断られ、路上で行おうとすると警官に止められるということで困り果てていました。そこに、札幌農学校の教頭として赴任してきた有名なクラーク博士が現れます。ちょうどその日が、札幌に着いた日だったのです。クラークは自分の寄宿舎を提供し、そこで札幌で最初のキリスト教の洗礼式が行われました。ご存知の通り、札幌農学校の初期の学生たちの中には多くのクリスチャンがいました。伊藤に続く二期生には内村鑑三や新渡戸稲造の名前があり、彼らは札幌バンドといわれ、日本のキリスト教の先駆者となりました。

さて、NHKは何を問い合わせたかというと、伊藤の洗礼式の様子です。聖公会のやり方で行われたに違いないのですが、しかしあとは想像するしかありません。まだ札幌には専用の礼拝堂はどこにもないので、質素に、水が入った容器を使って行われたのでしょう。その場面が映像で再現されるということでした。その後、伊藤は北海道の水産界の父と呼ばれ、千歳のインディアン水車やサケマス孵化の技術を発展させる功績を残します。伊藤の孫の孫にあたるのがタレントの中川翔子さんで、近く金曜夜の『ファミリーヒストリー』という番組で紹介されます。どうぞご覧ください。

チャプレン　下澤　昌